

1 食べ物があることの有り難さ<sup>がた</sup>

「歴史は繰り返す」、昔から言われている言葉  
です。私の年齢前後の人は戦争の恐ろしさを経<sup>おそ</sup>験<sup>けい</sup>  
して生きてきました。

私は、戦争には行きませんでした。が、志願し  
て兵隊になった人も大勢おられました。男は兵<sup>へい</sup>  
隊へ、家族は別れ別れ、農村に親戚を頼って<sup>しんせき</sup>  
疎開<sup>そかい</sup>（注1）していった（残された）家族も多数  
おられたようでした。

私達家族は、自分の敷地内で防空壕<sup>ぼうくうごう</sup>（注2）を  
掘り、空襲警報が鳴ると防空頭巾<sup>ぼうくうずきん</sup>（注3）を被<sup>かぶ</sup>  
りその中に逃げ込みます。B29（注4）という  
大型の爆撃機<sup>ばくげきき</sup>（注5）が飛んでくる音を聞きなが  
ら避難<sup>ひなん</sup>を繰り返していました。

とくに昭和20年に入ってから、新潟も爆撃<sup>ばくげき</sup>  
され、その当時の現実の姿をこの目で見てきま  
した。

飛行機の機関銃<sup>きかんじゅう</sup>（注6）が見えるくらい近くま

※ 上野様の体験談につきましては、上野様が平成24年に発行された「土に生きる」地域住民と共存共栄する都市農業を目指しての内容の中から、戦争体験の部分抜粋し、加工編集させていただきました。

（注1）疎開

災害や空襲に備えて、都会の人や物資・工場などを他の地に移すこと。

（注2）防空壕

空襲から身を守るため、地面を掘って作る待避所。

（注3）防空頭巾

戦時中、空襲などの際に飛来物から頭を守るためにかぶった綿入れの頭巾。

（注4）B29

第二次大戦中に登場した、アメリカの大型爆撃機。4基のエンジンをもつ。ボーイング社製。日本への空襲はほとんど本機により行われ、広島・長崎への原爆投下にも使われました。

（注5）爆撃機

爆弾を積んで敵地に行き、上空から爆撃するための軍用機。

（注6）機関銃

引き金を引き続けると弾丸が自動的に・連続的に装填（そうてん）・発射される銃。

で飛んできました。

多くの国民が戦争に関わっていましたが、

私は<sup>がくとどういん</sup>学徒動員（注7）で新潟鉄工所に<sup>はいそく</sup>配属され日中は働いていました。

食料も<sup>とうせい</sup>統制され<sup>はいきゅう</sup>配給（注8）制度が続き、食べ物<sup>べもの</sup>の無い生活を体験しました。自分の家が農家でも食べ物があるというありがたさを忘れることは出来ません。

昭和20年8月15日、<sup>しゅうせん</sup>終戦を迎えて新しい<sup>せいてい</sup>憲法が<sup>いっすん</sup>制定されました。一寸先の<sup>じだい</sup>見えない時代の中に生きていくことになりました。戦争から帰ってきた人達は、元の<sup>しょくば</sup>職場につく人、やみ屋を始める人、農業の仕事を受け継ぐ人、みんなそれぞれの道を歩み始めました。

私は昭和20年3月、新潟商業高等学校を卒業し、卒業証書を受けるも<sup>がくとどういん</sup>学徒動員として昭和20年4月から新潟鉄工所に<sup>しゅうせん</sup>就職して<sup>つと</sup>終戦まで勤めていました。

その体験から、食べ物を作っている仕事が一番、安心して生活が出来、生きていけるとして、

（注7）学徒動員

1938年（昭和13）頃から生産力増強の目的で、中学校以上の学生に強制した勤労働員。44年には学業は事実上停止され、在籍のまま軍需工場などへ動員されました。学徒勤労働員。

（注8）配給

統制経済の下で、不足しがちな物資の流通を統制し、特定の機関を通じて一定量ずつ売ること。第二次大戦の戦中・戦後に行われました。「一制度」

農業を迷うことなく選びました。

何を作っても口に入る物は、何でも売れた時<sup>じ</sup>  
代<sup>だい</sup>です。家の庭先に町のおかあさんやおばあち<sup>にわさき</sup>  
ゃんが大風呂敷<sup>おおぶろしき</sup>を持って買い出しに来ていまし  
た。子供に食べさせる命がけの姿を、今でも忘  
れることはできません。私は今でも食べ物捨  
てないようにして生活をしています。ケチケチ  
して生きることと、物を大切に生活することは、  
基本的に違います。

2 <sup>てっこうまるじけん</sup> 鉄工丸事件・・・昭和20年7月（新潟鉄工  
所4月入社）

東新潟から西新潟へ行く渡し船（はしか）

がB29（飛行機）の落とした機雷<sup>きらい</sup>（注9）で大  
勢（山の下）（入船<sup>がくとどういん</sup>）の学徒動員が亡くなりま  
したが、詳しいことは報道<sup>ほうどう</sup>されていません。

私もその船で山の下から入船の鉄工所まで  
<sup>つうきん</sup>通勤をしていました。その日だけは船に乗らず  
自転車で万代橋を渡って助かりました。

私はそれからどんなことがあっても、必ず助<sup>かなら</sup>

（注9）機雷

鋼缶に多量の爆薬を詰めて水中  
に敷設あるいは浮流させ、艦船の  
接触や接近により爆発させて破壊  
する兵器。音響機雷・磁気機雷な  
ど。

けてくれる誰かがいると思うようになりまし  
た。それは父であるか母であるか他人であるか、  
それとも神であるかわかりません。

人生でも社会でも、赤い実が好きな人でも  
黄色い実が好きな人でも、誰かがまじめに生き  
て行けば必ず幸福が訪れると私は信じてい  
ます。

昭和16年4月、明治23年生まれの私の父  
が、私を旧制の新潟商業へ入学させてくれま  
したが、その当時農家の長男が進学することは、  
本当に珍しいものでした。昭和16年12月8  
日は第二次世界大戦（注10）が勃発（注11）し  
た日でした。

旧7号線から北側（山の下方面）は、武器を造  
る軍需工場用地として強制的に土地を取り  
上げるということで、農業がやりたくともでき  
なくなることを考えた父は、ソロバンの実業  
学校を選んだわけです。

先見性があり学問のできる父でした。体は少  
し弱かったが、農業への先進的な考えと俳句を

（注10）第二次世界大戦

世界恐慌後、世界再分割をめざす後進資本主義国である日・独・伊のファシズム枢軸国と、米・英・仏・ソ連・中国などの連合国との間に起こった全世界的規模の戦争。1939年ドイツのポーランド侵入が発端となって開始され、41年日本の対米開戦による太平洋戦争の勃発とドイツの独ソ不可侵条約破棄による独ソ戦争により戦乱は一挙に全世界に拡大しました。当初は枢軸国が優勢でありましたが、42年後半から形勢は逆転し、43年スターリングラードの戦いでドイツが大敗して以後、43年9月イタリアが降伏、45年5月ドイツ、続いて8月日本が無条件降伏し、戦争は終結しました。

（注11）勃発

急に事件などが発生すること。「戦争が一する」

愛していました。母は昭和13年8月に亡くな  
っていますが、私の兄弟6人のうち姉が4人い  
たので、家庭のことや農業の仕事については  
ろうりよくてき めぐ  
労力的にも恵まれていたと思います。

私たちの少年時代は、戦争が厳しくなる昭  
和18年、19年頃から「日本が戦争に勝つま  
では」と、我慢する教育、国のために忠、親に  
こう  
孝が基本の教育であった。

むろん しゅうがくりょこう  
無論、修学旅行はなくなり、弥彦に行くこ  
とも、歩くことで体を鍛える訓練となりました。  
きた くんれん

学校も国民学校とかわり、勤労奉仕(注12)  
が義務付けられました。戦争が激しさを増して  
きたためスポーツや勉強を捨てて、私たち3年  
生(現在中学3年)から4年生、5年生は軍需  
こうじょう じょうきゅうせい あいちこうくう  
工場へ。上級生は愛知県の愛知航空で飛  
つく  
行機を造る工場へと送られていきました。

私は新潟鉄工で、人間魚雷艇(注13)という  
きとう  
8気筒のエンジンを乗せた一人乗りのロケット  
型の小さな船で、ゆそうせん ぐんかん  
輸送船や軍艦に体当たりをす

(注12) 勤労奉仕

公共の目的のために、無償で労力を提供すること。特に、第二次大戦中に学生などに課された無償の労働。

(注13) 人間魚雷

旧海軍が太平洋戦争で使用した、人間が操縦する魚雷。敵艦に体当たりして自爆することが目的の特殊な兵器。回天と命名されていました。

るとい<sup>やくめ</sup>う役目のエンジンをつ<sup>つく</sup>造<sup>てつた</sup>る手伝いをして  
いました。

たまには登校日が決まってお<sup>り</sup>、学校へ行く  
こともありましたが、それ以外は臨<sup>いがい</sup>港<sup>りんこう</sup>鉄道の  
ろせん<sup>ろせん</sup>の上を、雨の日も雪の日も鉄工所の職<sup>しょくば</sup>場に  
かよ<sup>かよ</sup>、従<sup>じゅうぎょういん</sup>業員と一緒に<sup>いっしょ</sup>なって仕事をしまし  
た。ご飯は豆<sup>まめ</sup>ご飯<sup>はん</sup>で、愛知航空<sup>あいちこうくう</sup>へいった生徒<sup>せいと</sup>よ  
り恵<sup>めぐ</sup>まれていたと思<sup>おも</sup>います。

ますます戦<sup>はげ</sup>争は激<sup>あざ</sup>しくな<sup>な</sup>っていきま<sup>い</sup>した。そ  
こで17歳以上は、希望<sup>きぼうしゃ</sup>者<sup>しや</sup>だけ<sup>だけ</sup>ではなく、皆<sup>みな</sup>、  
しょうねんひこうがっこう<sup>しょうねんひこうがっこう</sup>少年飛行学校7つボタンの予科練<sup>よかれん</sup>（注14）へ  
と進<sup>すす</sup>んで行<sup>い</sup>きました。多数<sup>たすう</sup>の学生<sup>がくせい</sup>、生徒<sup>せいと</sup>が兵隊<sup>へいたい</sup>  
として学校<sup>がっこう</sup>から巣立<sup>すだ</sup>って行<sup>い</sup>きました。

わが家は、女姉妹5人<sup>へいたい</sup>いるので兵隊<sup>へいたい</sup>に行<sup>い</sup>きま  
せんでしたが、仏壇<sup>ぶつだん</sup>の金具<sup>かなぐ</sup>や屋敷<sup>やしき</sup>の先祖<sup>せんぞ</sup>の大き  
な松<sup>まつ</sup>の樹<sup>き</sup>を供木<sup>きょうぼく</sup>（注15）したり、国<sup>くに</sup>が勝<sup>かち</sup>つため  
に協<sup>きょう</sup>力を<sup>りき</sup>していたこと<sup>こと</sup>をよ<sup>よ</sup>く覚<sup>おぼ</sup>えています。

国<sup>くに</sup>へ供木<sup>きょうぼく</sup>した跡<sup>あと</sup>に、戦<sup>いくさ</sup>後<sup>ご</sup>、植<sup>う</sup>えたのが現在<sup>いま</sup>  
西側<sup>にしがわ</sup>にある10本<sup>ほん</sup>ばかりの松<sup>まつ</sup>です。屋敷<sup>やしき</sup>に植<sup>う</sup>え  
てある樹<sup>き</sup>1本<sup>ほん</sup>1本<sup>ほん</sup>は、親戚<sup>しんせき</sup>から頂<sup>いただ</sup>いたものや私<sup>わたし</sup>

（注14）予科練

旧海軍の飛行機搭乗員養成制度。初め横須賀航空隊内に設置されたが、のち茨城県土浦に独立。小学校高等科卒（乙種）、中学四年修了者（甲種）を主とする志願制で、訓練を経て飛行科下士官となりました。

（注15）供木

上野さんのお話では、軍隊が来て船などの材料にするために、大きくて適した木を強制的に切って行ったとのこと。

が育てたもの、父が植えたもの、またおじさんが植えたものなど、みな思い出の樹です。

### 3 学校のグラウンドがサツマイモ畑に変わる

昭和19年～20年、戦争が長引くに従い食

糧が不足でした。軍も危機を感じ食糧（特に

穀物）をはじめ、タバコ、酒、その他嗜好品も

統制（注16）され、隣組（注17）に配給制度

ができました。それにより、自由に買うことは

出来なくなりました。

農家に買い出しに行き、帰りに米を買ってき

たのが見つかり、警察に取り上げられます。

強権発動「軍（政府）の命令」で、食料事務

所の係員が来て農家の米倉を厳重に調べまし

た。

少しでも余裕があればもっていかれます。ド

ブク（各家庭で造る酒）を造っているとして

税務署が調べに入ることもありました。それが

新聞に出されたため、どこの村の誰々の蔵に、

誰々の家に、ドブク（酒）狩りにいったとか

（注16）統制

政府の力で言論・経済活動などに制限を加えること。「言論の—」「物価を—する」

（注17）隣組

1940年（昭和15）に制度化された国民統制のための地域住民組織。五～一〇軒を一単位として部落会・町内会の下に設けられ、配給・供出・動員など行政機構の最末端組織としての役割を果たしました。

うわさ  
の噂を呼んでいました。

のうか いも むぎ  
私たち農家は、芋や麦など食料となるものを  
きょうせい てき さくづけ  
強制的に作付するよう指導されました。それ  
てっていき すいか  
は徹底的になされ、花や西瓜等を作る農家は  
ひこくみん むらはちぶ  
非国民（注18）といわれ、村八分（注19）にされ  
たものです。

（注18）非国民

国民としての義務を忘れた者。  
特に、第二次大戦前・戦中において、軍や国の政策に批判的・非協力的な者をおとしめていった語。

（注19）村八分

仲間はずれにすること。

私の家は前にも述べたように女姉妹で働き手  
はほかの農家より恵まれていたため、たくさん  
しゅうかく  
の収穫が出来ました。山木戸は秋から冬にか  
だいこん さんち だいこん  
けて大根の産地でしたので、町の人はこの大根  
はん だいこんめし  
を買い、ご飯にたくさん混ぜた大根飯で命をつ  
ないでいたようです。

いちば にわさき  
野菜は市場に出さず、庭先でよく売れまし  
た。

がくとどういん  
東京や神奈川、愛知など、大都市の学徒動員  
で働いていた学生や生徒は、[雑炊食堂]（ヤ  
こめ こめ ぞうすい  
ミ米）で米つぶが数えられるほどの雑炊で、命  
きぎょう じょうきゅうせい  
をつないだと帰郷した上級生から聞いたこ  
とがあります。

きんろうほうし  
我々も父兄の勤労奉仕（今のボランティア）

で学校の校庭やグラウンドをくわ 鋤やスコップで耕たがやして、芋いもを植えたりしたことなどが忘れられません。

どの家でも男性は兵隊、妻は買い出しで子供を育てていました。買い出しが一番の仕事であったように思います。

未婚女性みこんじょせいは、農家でも軍需工場ぐんじゅこうじょうに働きに行かなければなりませんけいさつ ぜいむしょ。警察、税務署、食料事務所各所員の奥様も自分の家族に食べさせるくろうのに大変苦労したといえます。

みな皆、同じ人間であり子供の親であるわけです。

◎ 昭和20年、このころ夜がしず静まってくると気持ちの悪い音が聞こえて来るようになりました。B29という飛行機の音です。無論、各家庭は電気を消しておかなくてはなりません。

信濃川の流れを目標に、上空からきらい機雷を落としていきます。新潟港を封鎖ふうさ(注20)するためか、山木戸地区にもいくつか落とされました。

わが家の裏の堀の中、伊佐池いさいけ(注21)の中、

(注20) 新潟港封鎖

新潟港封鎖

日本軍の補給と移動を阻止すること、日本への原材料と食料の輸入を阻止することを目的としたアメリカ軍の作戦。「飢餓作戦」。

日本本土沿岸の海上輸送網を寸断するため、1945年(昭和20年)3月に関門海峡に機雷を投下してから敗戦までの5ヶ月間に日本近海に1万2千個の機雷が投下されました。

アメリカ軍は、新潟を本州北部日本海側の第1級の機雷攻撃目標に定めていました。

同年5月14日、新潟市に初めての空襲があり、8月1日まで12回にわたって機雷が投下され、投下数はわかっているだけで781個に達しました。

出典：戦場としての新潟

(注21) 伊佐池

上野さんのお話では、米沢街道の堤防が切れて池になっていたとのこと。

現在は埋立てられて住宅街になっているとのこと。

かそうば  
火葬場（山木戸12区）の近く、旧7号線の近  
くと、私の近くだけでも4個落されました。

（注22）

らっかさん  
落下傘（パラシュート）が付いているので良  
くわかりました。

きらい  
深く潜った機雷は、戦争が終わってから住民  
いつてき ひなん せんもんか  
を一的に避難させて専門家により処理されま  
した。

◎ 楽しい思い出も沢山ある。

けんどうじゅうどう  
昭和16年～18年半ば頃まで、剣道柔道  
せいか  
は正科とされていました。私は歩いて帰るため  
きょうどけんきゅうぶ  
帰宅が遅くなるということで、郷土研究部とい  
うクラブに入っていました。体力作りでいく  
つかの山を登りました。テントや食料をリュッ  
せ お のじゅく  
クに背負って野宿（注23）します。

はんごう すいはん はんごう こ  
飯盒（注24）炊飯の美味しいこと、飯盒を焦  
くろう こ めし  
がして洗うのに苦労したことや、焦げた飯のう  
まいこと、蚊に刺されて痛い目をしたことも覚  
おぼ  
えています。

（注22）機雷投下

上野さんのお話では、1つだけ  
高圧線に触れて爆発したとのこ  
と。

残りは、地中に潜って爆発しな  
かったが、落下傘がついていたの  
で落下場所の特定ができ、軍隊が  
回収にきたとのこと。

（注23）野宿

野外に寝て夜を明かすこと。露  
宿。「道に迷って木の下に一する」

（注24）飯盒

野外で煮炊（た）きするための、  
携帯用の炊飯具。アルミニウム製  
で底が深い。もと日本の軍隊で開  
発され、今は登山・キャンプなど  
で使用されます。

佐渡ヘクラブで1週間、郷土研究きょうどけんきゅうに行って、  
峠とうげをバスが登れなくてバスから降りてバスを  
みなみな 峠とうげを越えたこともあります。木炭もくたん  
を焚たいて走るバスは力がないのです。

又、海岸が美しいのと自然があり、泳いでい  
ると魚が寄って来て体をつつかれて痛くて泳げ  
なかったこともあります。

宿は学校、お寺、野宿のじゅくで飯盒炊飯はんごうすいはんをするた  
め、薪たきぎ（注25）を集める係、谷から水を汲んで  
来る係、竈かまど（注26）をつくつくを造る係という当番があり、  
上級じょうきゅう5年生（今の高校2年生）がリーダー、  
先生どうこうは同行していません。その飯めしの味は今も忘  
れられません。

#### 4 戦争ますますはげが益々激しくなって来た（グラマー 戦闘機せんとうき、新潟しゅうげきを襲撃）

#### ◎ 昭和20年4月 新潟鉄工へ入社する

当時は就職しゅうしょくするにも、軍需産業ぐんじゅさんぎょう（注27）  
でないと勤められませんでした（軍の命令で）。

家の近くにっせきの日石、昭石しょうせき、北越製紙ほくえつせいし。北越ほくえつパル

（注25）薪

かまど・炉などで燃料にする細  
い枝や木。たきもの。まき。「一  
拾い」「一小屋」

（注26）竈

鍋や釜をかけ、下から火をたい  
て煮たきする設備。

（注27）軍需産業

軍需品を生産する産業。

へいわさんぎょう  
プ等がありました、平和産業（注28）である  
ということでした。

がくとどういん                      いっ お  
学徒動員として戦争が何時終わるか分から  
ないので、そのまま新潟鉄工へ入社しました。

かなづち  
始めは本当に基本的なもので、金槌の振り方  
それから 鑿（注29）を使って金槌で打つ訓練  
です。金槌で手を打って手の形が変わったこと  
も何回かありました。

のうり                                      いく  
今でも脳裏に焼き付いている事は幾つもあり  
ますが、東京の新潟鉄工所の本社、鎌田工場  
へ新潟工場に使用する機械部品（小さい物）を  
リュックを背負って取りに行かされたことがあ  
ります。

ぎょうてん                      ちゅうしんがい      や      のはら  
びっくり仰天、東京の中心街は焼け野原、  
所々黒こげになった白い土蔵だけが残っていま  
した。すでに焼け野原にバラック（あり合わせ  
で作った手作りの小屋）が建てられ生活をして  
いました。

そこちから  
人が生きる底力を見せられた感じでした。

こんざつ  
帰りの汽車は混雑そのもの、死に物狂いで窓

（注28）平和産業  
戦争に直接関係のない産業分  
野。軍需産業に対していいです。

（注29）鑿  
金属を切断したり、彫ったり、  
削ったりするのに用いる工具。石  
を割るのにも用います。

から身を半分出して、リュックの中の部品を  
無事に新潟まで持ってきました。今考えてみる  
と、東京から部品をリュックで運ぶなど馬鹿み  
たいなことをしていたことを思い出します。

◎ 我が家の裏に昔から、天理教新潟大教会  
があり、朝6時になると毎日、太鼓が鳴ります。  
お勤めが始まるのです。今は小針の消防学校の  
隣に移りましたが、元の天理教の離れの建物  
が通信隊の兵舎となり、向かいの小高い所がそ  
の兵隊さんの大きな防空壕でした。我が家の  
敷地内にも近くの人が避難する防空壕があり  
ました。防空頭巾（綿を厚くして作った帽子）  
をかぶりB29が来ると何回か避難した思い出  
もあります。

◎ グラマー戦闘爆撃（アメリカ軍の小型の  
戦闘機）新潟を爆撃  
昭和20年5月～6月になると、アメリカ軍  
は自由に、なんの日本軍の抵抗もなく本土（日

本)を飛んでいるような気がしました。日本が戦争に負けることは、若い私等にもその時感じました。

おそらくアメリカの航空母艦(注30)が日本の近くにいて、そこから戦闘機が飛び立っていたのであろうと思います。新潟まで我がもの顔

に飛んできた戦闘機により、新潟鉄工所、特に入船側の造船工場と新潟飛行場が集中攻撃を受けました。そのグラマー戦闘機の攻撃

により工場内の高圧線(注31)が切られました。機関銃の弾がいかに低空から撃たれたかが分かります。

その恐ろしさを経験した私達は、2階の教室で製図(注32)の勉強をしているときなどは、階下に降りて机の下へ避難したものです。

運悪く攻撃されている最中に、おけさ丸が入港して来ました。射撃されて船体にいくつか穴があきました。同時に火薬を積んでいたと思われる戦艦も撃たれ、火薬の燃える爆発音が約一週間も続いていました。本当に戦争の恐ろ

(注30) 航空母艦

航空機を積み、これを艦上で発着させるための飛行甲板を備え、また格納・修理設備を持つ軍艦。第二次大戦以降、戦艦にかわって海上兵力の中心となりました。空母。航母。

(注31) 高圧線

高電圧の送電線や配電線。

(注32) 製図

機械・建築物・工作物などを製作するため、その形や大きさを書き表した図面を製作すること。

し<sup>きかんじゅう</sup>さ、機<sup>のうり</sup>関<sup>のこ</sup>銃の音がいつまでも脳裏に残っています。新潟まで攻<sup>こうげき</sup>撃を受けたことで、戦争ももう終わりと感じました。

◎ 申<sup>おく</sup>し遅<sup>わたしたち</sup>れましたが、私<sup>がくとどういん</sup>達の学徒動員の係をしてく<sup>はんちょう</sup>れた班<sup>ぐんたい</sup>長<sup>けいけん</sup>さんは、軍隊の経<sup>じょう</sup>験<sup>あつ</sup>もあり、思<sup>あご</sup>いやりの情<sup>こ</sup>の篤<sup>いっけん</sup>い人<sup>おやかた</sup>でした。顎<sup>はんちょう</sup>ひげが濃<sup>い</sup>い、一<sup>はんちょう</sup>見<sup>おやかた</sup>おっかない親方と思<sup>い</sup>ましたが、物<sup>はんちょう</sup>の無<sup>い</sup>い時、班<sup>はんちょう</sup>長<sup>さん</sup>さんの家（新潟古町）に正月、私<sup>わたし</sup>達<sup>たち</sup>を呼<sup>よ</sup>んでくれました。

その班<sup>はんちょう</sup>長<sup>さん</sup>さんは佐藤信一さんという人で、  
後<sup>のちのち</sup>々<sup>しつこういんちょう</sup>新潟鉄工の執<sup>つと</sup>行<sup>しつこういんちょう</sup>委員<sup>つと</sup>長<sup>しつこういんちょう</sup>をお務<sup>つと</sup>めになり、  
新潟市<sup>しにかいぎいん</sup>の市会<sup>しにかいぎいん</sup>議員<sup>しにかいぎいん</sup>を何<sup>なん</sup>期<sup>き</sup>かおやりにな<sup>な</sup>られた方<sup>かた</sup>  
です。そのことを新聞等<sup>しんぶん</sup>で知<sup>し</sup>り、本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>に立<sup>り</sup>派<sup>っぱ</sup>な  
班<sup>はんちょう</sup>長<sup>さん</sup>との出<sup>い</sup>会<sup>かい</sup>いであ<sup>あ</sup>ったと感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>していま<sup>いま</sup>す。

会<sup>かい</sup>社<sup>しゃ</sup>では、金<sup>かなづち</sup>槌<sup>づち</sup>の使<sup>つか</sup>い方<sup>かた</sup>から始<sup>はじ</sup>まり、製<sup>せい</sup>図<sup>ず</sup>の勉<sup>めん</sup>  
強<sup>きやう</sup>もしま<sup>しま</sup>した。最<sup>さいご</sup>後<sup>ご</sup>は、製<sup>せい</sup>図<sup>ず</sup>に必<sup>ひつ</sup>要<sup>よう</sup>な物<sup>ぶつ</sup>を一<sup>いっ</sup>式<sup>しき</sup>  
預<sup>しゅうせん</sup>かって終<sup>しゅうせん</sup>戦<sup>せん</sup>（注33）とな<sup>な</sup>りま<sup>ま</sup>した。

（注33）終戦

戦争が終わること。特に、日本が1945年（昭和20）8月14日ポツダム宣言を受諾し、15日に連合軍側に無条件降伏したこと。

◎ 戦争が、もう1カ年早く終戦しゅうせんを迎えていれば、国も国民も戦争の被害を10分の1に減らされたかもしれません。一握りの先見性せんけんせいのない指導者しどうしゃにより、大きな被害を受けました。

会社も同じことです。私が16、17歳に教わった財産の三分法ざいさんさんぶんぽう（三角型経営さんかくがたけいえい）、経済の三原則さんげんそくを護まもっていれば、バブルの崩壊ほうかいもなかったと考えます。何時いつの時代じだいでも、基本まもを護まもることは重要じゅうようです。

基本きほんの護まもれない会社は皆みな、倒産とうさんして行きままもす。それは間違いじじつのない事実じじつです。

基本きほんとは、あくまでも $1 + 1 = 2$ であるということです。バブルの時代じだいのように $1 + 1 = 5$ 的な感覚かんかくに流されてきました。現在げんざい、不景気ふけいき、不景気ふけいきといっても、食べ物ほうふは豊富き、着るものも豊富ほうふ、住宅ふじゆうはそこそこで何の不自由ふじゆうもありません。

心こころの持ち方次第もで、個人個人しだいにあった生き方こじんこじんのスタイルができればと思います。

## 5 戦争と終戦

支那事変（注34）、そして第二次世界大戦

と大きな変化のあった時代は、新潟商業の学生

時代と、学徒動員として勉強を捨てて、軍需

工業のある新潟鉄工所で働き、豆飯、大根飯、

菜っ葉飯の毎日でした。

話は前後しますが、どこへ行くにも皮靴（編

みあげ靴・牛革ではなくさめの革）を履いて

行軍（歩くこと）します。体力をつけて、戦争

に行くための軍事教練（注35）を、学科として  
やらされました。

学校町通3番町の学校まで歩いて通いまし  
た。沼垂の蒲原神社の裏を通り、長峰町から昭

和橋まで田んぼの畦道（注36）をとおって学校  
へ行きました。

当時、学校へ行く途中には新潟鉄道局の木造

の官舎がかなり建っていました。ほかには気象

台の建物、水族館（当時は戦争で魚はいなかつ  
た）などがありました。

昭和橋を渡ると白山小学校、白山公園、陸上

（注34）支那事変

日中戦争

1937年（昭和12）7月7日、盧溝橋（ろこうきょう）事件にはじまり、45年8月15日、日本の無条件降伏にいたるまでの日本と中国の戦争。当初、日本政府は北支事変とよび、不拡大方針をとりましたが、軍部は戦線を拡大して主要都市・鉄道沿線を占領、宣戦布告のないまま、全面戦争に発展。中国は37年9月の第二次国共合作による抗日民族統一戦線が各地で抗日戦を強化しました。41年12月太平洋戦争の開始後は第二次大戦の一環となりました。当時、日本側は支那事変・日華事変・日支事変とよびました。

（注35）軍事教練

1925年（大正14）以降、現役将校を配属して、中学校以上の生徒・学生に、正科として行われた軍事に関する教練。45年（昭和20）廃止。学校教練。

（注36）畦道

田と田の間の細い道。

競技場、県庁等があり住宅が並んでいました。

新商の学校の向かいが、今の明訓高校の前進で  
ある夜間中学校があった思いでがあります。

昭和18年夏頃までは、銃剣術の棒

(竹槍のようなもの)をもって、軍人の将官

から軍事教練を受けます。軍事教練も正科で  
した。

学校が海に近いので海水浴をしたり、西堤防  
のコンクリートに自然に沢山ついていたカキ

(食用貝)を食べたりしました。そのカキは、  
とがった金具で取り、浜辺で焼いてから海水で  
味を取り食べるのです。遊んだ楽しさも忘れら

れません。上級学校にあげてもらったお陰です。

## 6 鉄工丸事件からの教訓 (注37)

山での飯盒炊飯の飯のうまかったこと。

鉄工所で学徒動員として働いた経験。小学校の

グラウンドを耕してサツマ芋を父兄と一緒に

植え付けたこと。B29飛行機による機雷の

投下。東京の焼け野原に生きようとする人間模

(注37) 教訓

教えさとすこと。また、その教  
え。

よう きょうけんはつどう こめぐら  
様。各農家は「強 権 発動」(農家の米倉を  
きょうせいてき あせみすなが しゅうかく  
強制的に調べる)により、汗水流して収 穫  
こめ ぐんせいふ  
した米が、軍政府の命令で持っていかれる苦し  
い体験。グラマー戦闘爆撃機の恐ろしさの体  
験。鉄工所の班 長 さんの篤い人 情。

もっと早く戦争が終わっていれば被害も少な  
ひがい  
くてすんだという反省等、さまざまなことがあ  
はんせいなど  
り、出会いがありました。それが経験となり、  
けいけん  
思い出となり、反省となり、私の人生の宝とな  
はんせい  
っています。

## 7 戦争により私の人生の宝が生まれる

(私が戦争に行かなかったからと思いますが)

それは私にとって一生の宝となりましたが、

じっさい ひがい こうむ とら  
実際に被害を被っている人もあり、捉え方は  
ひじょう むずか ひがいしゃ  
非常に難しいのですが、被害者と思っている  
おお  
人が多いようにも感じます。

「戦争に勝つまでは」という目 標 がありま  
もくひょう  
した。国民が一致団 結して国の方針にしたがい  
いっちだんけつ ほうしん  
がんば  
頑張りました。その力が戦争に負けても、世界

ちゅうもく はってん  
の中の日本として注 目される国に発展し、

げんざい  
現在の日本があるものと考えます。

もくひょう ちゅうごく  
目 標を持つことは大切なことです。中 国、  
かんこく とうなん ゆた  
韓国、東南アジアの国は、日本のように豊かな  
国になりたい、日本を追い越したいという

もくひょう  
目 標を持っています。日本はアメリカを追い  
越してから ちゅうごく けいき  
越してから目 標がなくなり、バブルの景気に  
う  
浮きました。

かっこく のうぎょうしさつ とく ちゅうごく  
各国の農 業視察をした私は、特に中 国、  
かんこく とく もくひょう  
韓国について、特に日本を目 標にしている  
わかもの かがや  
若者の目の輝 きを感じました。

がくとどういん  
私にとっての人生の宝とは、学徒動員をはじ  
め、かか けいけん せきにん  
め、その関わりの経験から、仕事の責任、もの  
の大切さ、自分で生きていく努力、どりよく めいわく  
人に迷惑を  
かけない教育、そせん せんばい うやま  
親、祖先、先生、先輩を 敬う  
など、きほん たいせつ  
生活の基本の大切さが自然に身に付いた  
ことです。

しごと  
仕事のやりがい、生きがいにより、自分が生  
きている ぼこ おそ きそ  
誇りを自然に教わり、人生の基礎を学  
ぶことができました。本当に私は、しあわせもの  
幸福者と

かんしゃ  
感謝しています。

しゅうせん けいけん  
戦争と終戦の経験をさせてもらいました。

こく민がっこう  
戦後は、学校も国民学校（注38）から六・三・

せい  
三制の戦後教育に変わっていきました。

## 8 敗戦とマッカサー元帥

しょうご きょくおんほうそう  
8月15日正午「玉音放送（注39）」があ

しょうご じほう ただいま  
りました。正午の時報とともに「只今より

じゅうだい ほうそう ちようしゅしゃ  
重大なる放送があります。全国の聴取者の

みなさま きりつ つ  
皆様、起立を願います」との告げがありました。

てんのう しょうしょほうそう  
天皇による詔書放送が流されました。

ごうがい  
前もって号外（注40）が出されていたの

ほうそう なかみ  
で、家に居ました。ラジオを聞くも放送の中味

がさっぱりわかりませんでした。後で聞くと日

むじょうけんこうふく かみ  
本は「無条件降状（注41）」したといひます。神

くに かみかぜ お  
の国日本は、神風が起こらずに負けたといひこと  
とでした。

## ○ 敗戦によって、新潟にも外国人兵隊が捕虜

へいたい  
生活（注42）をしていましたので、その兵隊さ

（注38）国民学校

1941年（昭和16）から47年までの日本の初等普通教育機関の名称。「国民学校令」に基づき、従来の小学校を改称し、戦時体制に即応した国家主義的な教育を行ないました。初等科6年、高等科2年を義務教育年限としました。

（注39）玉音放送

1945年（昭和20）8月15日、昭和天皇みずからの声でラジオを通じて全国民に戦争終結の詔書を放送したこと。日本国民ははじめて天皇の肉声に接しました。

（注40）号外

新聞社などが、重大な事柄や突発的な事件を早く報道するため臨時に発行する印刷物。

（注41）無条件降伏

交戦国の一方が一定の降伏条件を無条件に受諾して降伏すること。

（注42）外国人捕虜

労働力の不足を補うため、強制的に日本に連れてこられた中国人、朝鮮人、捕虜となった欧米人（アメリカ、イギリス、カナダ、オランダ、ノルウェー、オーストラリア、ニュージーランド）兵士が、厳しい労働・生活条件の下で港だけでなく、新潟市内の工場でも働かされていました。

出典：戦場としての新潟

んへ食糧を運ぶヘリコプターの音がよく聞こえ

ました。<sup>ふじょぼうこう ざんぎやくこうい</sup> 婦女暴行や残 慮 行為が行われるとの

<sup>うわさ</sup> 噂 がありましたが、そのような話は聞きません

でした。<sup>ほりよ へいたい かんしいん</sup> 捕虜の兵隊の監視員をしていた新潟の

私の知っている人は、戦争が終わっても感謝さ

<sup>こうさい</sup> れ交際が続いたという話を聞いています。

○ <sup>ますますしょくりょうなんじだい</sup> 益々 食 糧 難時代を迎え、お金でなく物と

<sup>こうかん こじんこじん</sup> 物の交換の引き取りが個人個人でも行われ、

<sup>いつ やみや おうぼう</sup> 何時となく東京方面よりきた闇屋が横暴

<sup>ばいばい</sup> (注43) し、品物や高いお金の売買が始まりま  
した。

<sup>いも</sup> 芋のつるを食べ、モチグサやとうもろこしの  
<sup>かんそう たばこ</sup> 毛を乾燥して、煙草のかわりに吸っていましたが  
が私は吸いませんでした。

<sup>しんせき ちじん にもつ そかい にもつ</sup> 町の親戚の人や知人の荷物 (疎開した荷物)  
<sup>どそう あず ねら どそう</sup> を土蔵に預かっていました。それを狙う土蔵や  
ぶり (どろぼう) にあいましたが、<sup>たくさん にもつ</sup> 沢山の荷物  
でわからない程でした。<sup>ほど じだい</sup> このような時代、物を  
持っている者は<sup>たいへんめぐ</sup> 大変恵まれていました。

(注43) 横暴

自分勝手な振る舞いをする・こ  
と(さま)。

我々農家も人手があれば、食糧を生産して人  
から喜んでもらい、生活もサラリーマン家庭よ  
りずっと恵まれていましたので、敗戦と同時に  
自然の型で農業の道を歩き始めました。

食糧増産のため人より少しでも多く収穫す  
るには、朝早く起きて知り合いや知人をたよっ  
て、人糞を汲みに行きます。その人糞をもらう  
にも、代替の礼として米を届けなければ肥料  
は手には入らない時代でもありました。収穫  
した野菜でも芋でもよく売れ、農家としての笑  
いの止まらない時代を思い出します。